



## 史傳

國學と荷田春滿 (承前)

米 溪

國學の語は實に春滿によりて唱へ出されたり、乃ち我が國の有ゆる學問を含有し、以て日本國民の性格を發揮して、日本の道とする所如何を研究せんとせしなり。支那思想及び佛敎の未だ入らざりし以前の我が國民の思想如何、我が國体の成立如何を研究せんとして古文辭の研鑽を勉めたりしなり。故に此の學は、一方にては神道なるものを其の根底として、古文學は道具としたりしなり。純粹なる道は古文學の上に存するものとし、斯の

國の言語文字を基として斯の國の道を發揮せんとせしものなり。されは文法、歌學、典故の學も亦斯道研究の料たるのみ、日本の真相を知る所以の道たるのみ。之れ國學の本領にして、此に着眼せしは春滿なり。我が文學を基礎として我が國体を研究するを根本の目的とする基礎を定めしなり。時勢は偉人を生ず。春滿は寛文九年を以て生る、(時正に林鶯峯本朝通鑑を撰ひし前年にして、契仲三十歳の時なり) 父は神職にして信詮と云ふ、伏見稻荷の社司たり。弟信名家を繼ぐ。荷田は其の姓にして羽倉を氏とし、初め信盛と云ひしが、後春滿(或は後に東丸、又は東麻呂とも稱す)と改む、幼にして國史律令の學に志し、古文古歌を研究し、博覽にして諸家の末に至る迄涉獵せざるなし。時に儒道盛に行はれて古道振はず、闇齋垂

加流の神道を説き天下を風靡すと雖も、到底陰陽五行の説を脱する能はず。吉川惟足卜部兼從等の如きあるも、亦神佛混淆を免るゝなく、彼の支那儒教の糟粕を嘗むるに非ざれば、乃ち印度佛説の餘瀝を啜れるのみ、偶々歌道の復古説ありと雖も亦未だ日本人の道とする所を明かにせんとするものあざりしなり。春滿此に於て慨然志を起し大に古道を振はんとし、契仲、長流の古歌研究を繼ぎ、之を基礎として以て神道を發揮せんとす。而して其の學は多く獨學に得たりと云ふ。

時に幕府の昌平黌甚だ盛にして儒教獨り時を得たり。春滿謂へらく、之に對して國學の覺なかるべからずと、是に於て幕府の力を假り東山に國學の覺を設け大に斯道を起さんと欲し、江戸に至り請ふ所ありしが、事果さず。其の上書中、國學な

る語あり、是れ實に我が國學を稱する初めなり。幾くもなく、病を得て京師に還り、元文元年を以て歿す。

蹈み別けよ大和にはあらぬ唐鳥の

あとを見るのみ人の道かは

とは蓋し其の理想にわらずや。

惜い哉、言、時に用ひられず、不幸早く歿せしは實に斯道の爲悲むべしと雖ども、醜郁たる薰香、冥々の裡之に對するもの自づから化せざるなけんとす、豈徒爾にして止まんや。宜なる哉、享保元年其の江都に遊ばんとするや、加茂真淵刺を通じて、一夕の會、感想忽ち動き、江門一朝の遊は、其の子在滿をして田安宗武に仕へしむる因をなし縁て遂に田安侯の眞淵聘用となり、互に夤縁して國學勃興の氣運をなすもの、誠に偶然ならざるを

覺ふ。

偉人既に逝きぬ、然りと雖ども、風化の及ぶ所決して一代にして爲すなきに終るものにあらず。大風既に波を激す、澎湃として滔天の勢をなし、眞淵宣長より以て篤胤に傳へ、遂に維新の際に及ぶ遮らんと欲するものは碎くべし、支へんと欲するものは壓すべく、風雲巨浪を捲て震天の大業倏忽に定まるもの、抑も亦我が國民的精神の彼の餘烈に薰して煥發せる所以に非ざるか。英魂土に歸してより百六十有六年、王化四海に敷て、皇威遠く海外に振ふ。之皆其の影響の波及する所、恐らくは、春満自からと雖ども、爾く大なるものあるべしとは豫想せざりし所ならん。

今にして之を評すれば或は世界的眼光缺くる所あり、考古に偏して變通に乏しく、自から高うし

て長短補修の策遺す所あるが如きも、時勢に乗じて見を定め、流俗を抽で卓然標識せる所獨り此の人にして期すべきを知る。若し夫れ之を九泉の下に起して今日に處せしめんか、庶幾くは撼地の大業期して待つべきものあらんとす。

吁國學の基礎は既に此の偉人によりて定められぬ、而して俯仰今を鑒むれば、所謂國學者たるもの果して如何の狀ぞ、人は稱して迂濶となし、而も自から恬たるなり、世は目して悠長、事に疎なりとして而も自から甘んずるが如し。之れ豈國學ならんや。國學は爾く迂濶なるものにあらざるなり、爾く悠長なるものにあらざるなり。否、迂濶なるものは國學の精神に非ず、悠長なるは國學の用にあらず、活潑々地、靱々として時と相化し、常に時勢の先導となる所以のものは、豈斯道の精

神に非ざらんや。

世情は終始一定地に固着するものにあらず、時と變じ歳と移る、而して達見の士常に卓然なる識見を以て其の進轉の勢を看破し以て時勢の變に應ず、此に於て風化靡然として行はれ、万世の下、人をして坐に遺風を欽仰せしむ。春滿の如き蓋し其の人か。

維新以來三十年、文化駁々として日に進むと雖とも、斯道獨り舊套を脱せずして世と相背かんとす。吁是れ其の學の否なるか、時の不可なるか。皆あらず、卓然時に超出して世を導くの偉人なきのみ、眞に斯道の偉人なきのみ。

出でよ眞の國學者、人は泰西文物の華に醉ふて之を同化する所以を知らず、世は歐米開明の勢に眩して遂に自國を忘れんとす。吁、是れ明治の春

滿を要するときに非ずや。出でよ眞の國學者、斯の人出でずんば夫れ斯道を奈何せん、吁、此の國家を奈何せん。時は俟てり、世は俟てり。借問す誰れか明治の春滿たるものぞ。否、明治の春滿を出すは誰れの任ぞ。

